短期留学生の日常会話の相互行為分析

－対照的な人間関係を構築した学生を比較して－

長谷川敦志(ケンタッキー大学)

1. はじめに

留学における第二言語習得研究は，昨今，様々な分野から影響を受けるようになり，学際的なアプローチに焦点が当たるとともに，言語習得や言語使用のみならず，それを取り巻く社会的な要因を包括的に分析・理解しようとする研究が増えている（Kinginger, 2013）．学習者自身のアイデンティティ，性格，能力，学習スタイル，動機など個人的要因をはじめ，諸々の環境要因，人間関係の構築プロセスや社会ネットワーク的な視点，さらにはマクロレベルの政策や社会制度をも総合的に分析し，それらと言語使用の関係を解明する試みが，ここ数年で見られるようになってきた（e.g., Jackson, 2008）．同時に，言語使用を分析する枠組みとして，参加者視点のマルチモーダルな相互行為全体をミクロなレベルで記述する会話分析（以下，CA）の手法も盛んに用いられるようになった（e.g., Greer,2018）．これらの研究は，単なる言語形式の産出としてではなく，社会活動への参加プロセスとして，言語使用を記述しようとしたものであり，前述の留学研究の動向とも合致する．

本研究では，このような潮流を汲んで，短期留学生の言語社会化プロセスの包括的な記述を目指したプロジェクト（Hasegawa, forthcoming）から，特に対照的な人間関係を構築した二人の留学生の相互行為（会話を含む）の特徴的なパターンに焦点をおき，会話を比較・分析する．言語社会化の要素として，人間関係と相互行為を中心に記述した．人間関係についてはその重要性が以前より言われているものの，体系的に記述する試みがあまりされてこなかった．しかし，社会ネットワーク分析（以下，SNA）の発展により，人の繋がりを体系的に分析し，それを視覚化する試みが多くなされ（特に，社会学や社会言語学において），第二言語習得研究でも注目されつつある（e.g., Kurata, 2011）．また，第二言語習得研究における CA の重要性が高まる中，様々なリソースを場面に応じて使用できる相互行為能力（interactional competence）に注目し，利用可能なリソースの多様化を観察する研究も増えている（Pekarek Doehler & Pochon-Berger, 2011）．このような動きに応じ，本研究でも，短期留学生の相互行為能力を記述することを目的とした．

2. データと分析方法

本研究は，夏季集中日本語プログラムに参加した二人のアメリカ人学習者，ローズとジョー（共に仮称）に焦点をおき，彼らの相互行為のパターンを分析した．この二人に注目する理由として，対照的な人間関係の構築が挙げられる．人間関係構築プロセスを分析するために，プログラム期間中（８週間）エスノグラフィー的な参与観察を行い，プログラム開始時と終了時の二回，留学生全員に調査紙を用いて SNA 調査を実施した．会話データは学生当人が IC レコーダーで録音した日常会話と研究者がラウンジなどの共用スペースで録画した映像である．前者は，学習者に携帯型 IC レコーダーを持たせ，プログラム期間中，継続的に自然な会話を録音してもらった．会話相手やトピック，場面，使用言語などの指定はせずに出来るだけ普段通りの会話を自然な形で録音してくるように指示した．合計でローズから７時間超，ジョーから２時間程度の会話データを収集した．その中から，特に特徴的な相互行為に焦点を当て，二人の留学生がどのようなリソースを利用しながら相互行為に参加していたかを詳細に記述した．

3. ローズとジョーの社会ネットワーク構築

ローズとジョーの人間関係は対照的に構築された．紙面の制限上，ここではそのプロセスを詳細に記述することができないが，ローズは最初から多くの人と交流を持ち，プログラムの「中心的」な存在となった．所謂「広く浅い」人間関係で，積極的に様々な活動に参加した．それに対し，ジョーは数少ない限られた人間との関係を好み，最終的に二人の友人としか日常的に関わることがなくなってしまった．その傾向はプログラム期間中にどんどん強くなっていった．このよう

な傾向は，インタビューやプログラム開始時と終了時に実施したSNA調査の結果からも裏付られる．例えば，図１[1]の左側の図はローズのプログラム終了時の繋がり（egocentric network）を示したものであるが，ローズがプログラム中に多くの人と繋がりを作ったことがわかる．一方で，右側の図はジョーの繋がりを示したもので，ローズと比べて明らかに人数が少ないことがわかる．このグラフはプログラム参加者全員（３０名）に対して行なった調査の結果であり，当人以外が二人に対してどう感じているかをも反映していることから，二人の人間関係プロセスが異なっていたことは明白である．

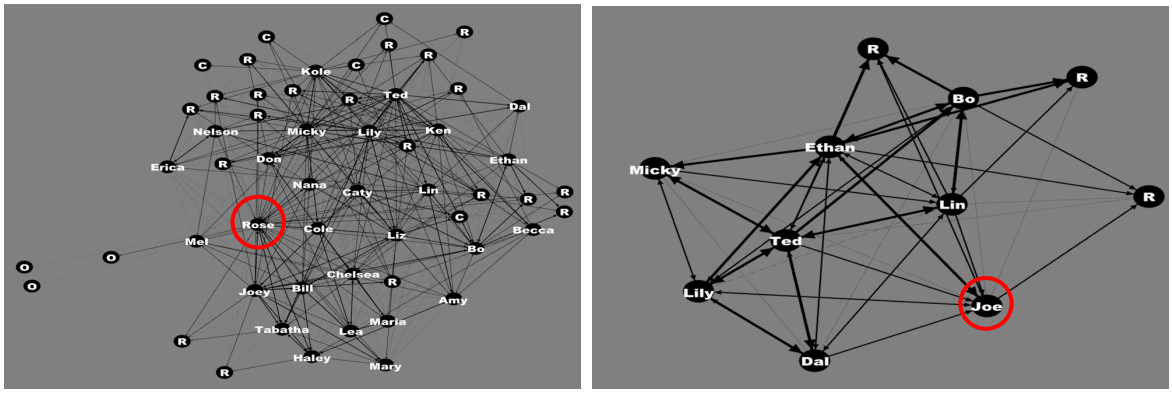

図１．ローズとジョーの人間関係（プログラム終了時のegocentric network）

4. ローズの相互行為パターン：複数人会話・複数会話の参加

留学中の相互行為のパターンを理解するために，二人の提出した自然会話（音声）と研究者がラウンジなどの共用スペースで録画した会話をCAの枠組みで分析した．ローズの相互行為は概して，複数人会話が多く，例えば，ローズが提出した１３の会話のうち，一つのみが一対一の会話で，残りは全て三人以上の複数人会話であった．また，ローズは複数の会話に同時に参加したり，頻繁に出入りしたりする傾向があった．この傾向を如実に表す会話では，５分程度の間に，周りの会話への出入りを15回も行なった．それを端的に示したのが以下の図（図２）である．

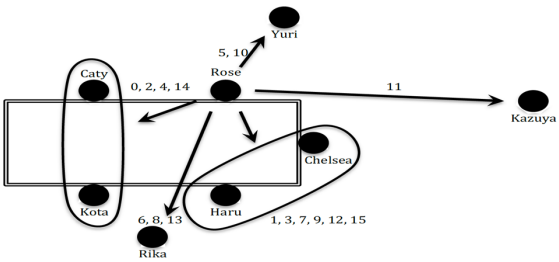

図２．ローズの相互行為パターン：複数会話への出入り

ローズの右側と左側で独立した会話が行われており，ローズはこのどちらにも参加している．また，他の場所に座っている人や近づいてきた人に対しても話しかけるなどしている．このように頻繁な参加シフトを行うためには，様々な言語的・非言語的なリソースが使われており，ここでは，その中から二例に絞って紹介する．

<Shift 4>
1 Kota: アイアムリーダー.
2 Caty: にて[な：い=
3 Kota: [アイアムリーダー
4 =おれ[がリーダー=
5 Caty: [にてな：い[けど
6 Rose: =[いつも：(.)
7 おれが[リーダー
8 Kota: [おれがリー=
9 Rose: =おれがリー[ダー
10 Kota: [おれがリーダー=
11 Rose: =おれがリーダー=

左の断片では，ローズはextreme case formulation (ECF)を利用している．この断片の直前まで別の会話に参加していたローズが，６行目に，「いつも」と言う表現を用い，この会話に参入している．これは，典型的なECFで，話し手が非難や不平を言う際に，極端な語彙を用いることにより，自分の意見の正しさを主張する際によく用いられる(Pomerantz,

[1] このグラフは，お互いにどのぐらい親しさを感じるかという尺度でプログラム参加者に回答してもらった結果である．名前が示されているノード（接点）はプログラム参加者，Rはルームメート，Cは日本語チャットクラブメンバー，Oはその他の人間を表す．線は繋がりを示し，親しさを感じないと回答した相手とは繋がりはないことになる．矢印は繋がりの方向性を示す．線の太さは繋がりの強さ（3段階）を表す．なお，このグラフは*Gephi*というプログラムを使って作成した．

1986)．実際，ローズのこの発言は孝太を非難しているように聞こえる．この発言の直前に，孝太とケイティーはタブレットでゲームをしており，孝太がゲームに勝ち，「アイアムリーダー」と言いながらその喜びを表しているのが１行目である．ケイティーは２行目で「にてない」と発しているが，これは英語の「You don't look like that」の直訳だと思われる．つまり，孝太の「リーダー」に反論しており，ローズの「いつもおれがリーダー」はこのタイミングで発せられている．面白いことに，ローズの発話は，孝太の「おれがリーダー」の直後に，ヘッジなしで始まっている．非難を含む非優先応答は，通常遅れを伴って発せられるが，この場合は間髪なく入っており，より強いものに聞こえる．しかし，ローズは笑顔でこの発話をしており，「本気でない」指向を見せている．実際，この後，このやり取りは言葉遊びとなり，結局は笑いを伴ったエピソードとして終わる（省略）．

<Shift 14>
1 Kota: きょうはおれのひ：でしたわ：：
2 (1.2)
3 Kota: .hhhh おれのひやわ：：
4 (1.5)
5 Rose: うるさい[わ：hhhh=
6 Haru: =え?
7 Caty: [あ：：：いやだ：：=
8 Rose: =あち：=ひひ[ひひ
9 Caty: [ごめんごめん=
10 Rose: =くわっ
11 Caty: やだやだやだ：(.)[まけ-
12 Kota: [え：?=
13 Caty: =まけるのがやだ：：=
14 Kota: =じゃあサッカーやるか：. サッカー.=
15 Rose: =サッカ(h)ー=hhh=
16 Kota: =サッカー
17 Rose: おれのひ：だ：：
18 Kota: おれのひおれのひ
19 おれのデー=
20 Rose: =おれ(h)はリーダー
21 [おれのひ：だ：]
22 Kota: [へへへ]おれ(h)の(h)
23 おーやべ- いんふみだしった.hh
24 おれのひ：だ.おれはリーダー

左の断片では，ローズはさらに「本気でない」指向を出し，「からかい」を行なっている．この断片の直前に，孝太が再びゲームに勝ち，大げさに喜びを表現しているのが１行目である．５行目にローズが再び批判的な表現「うるさいわ」を笑いとともに発している．これにより，この会話のローズの指向が「本気でない」ことを示している．ローズは，前に座っている春に顔を向け発言しており，このエピソードに春を誘おうとしている．６行目で春が一旦反応するが，その後，ケイティーがローズの手にぶつかり，短いサイドシークエンスが行われている間に，春は元々話していた会話を再開する．

その後，１１・１３行目で，ケイティーは「もう孝太に負けるのがいやだ」と言い，孝太が１４行目で別のゲームを提案する．この提案に対して，ローズは笑って「サッカ(h)ー=hhh=」と反応する．この笑いは嘲笑のように聞こえる．その後，１７行目で「おれのひ：だ：：」と，孝太の発話を真似しながら，繰り返す．ここで注目したいのは，この発話の「ひ」と「だ」の母音が伸ばされていることで，これが後に言葉遊びにつながっていく．１８・１９行目で，孝太も「おれのひ，おれのひ，おれのデー」と繰り返し，ローズは，２０・２１行目で「おれ(h)はリーダー」「おれのひ：だ：」と韻を踏んで言葉遊びを始める．その後，何回かこのやりとりが繰り返され，このエピソードは終了する．ここで面白いのは，ローズがこの「遊び」をかなり意図的に始め，それを周りの会話者を巻き込みながら繰り広げている点である．このような会話を行うためには，このような会話ができる相手であるという聞き手に対する話し手の評価が必要であり，ローズは周りの人間を遊びに参加できる相手として認識していることがここから窺える．このようなローズのスタンスはこの会話以外にも多く見られる．

5. ジョーの相互行為パターン：異なる認識的優位性の表出

ジョーの提出した２０の会話の中でたった一つのみが複数人会話で，残りは全て一対一の会話であった．また，会話相手もほぼ決まっており，ルームメートの次郎とクラスメートのイーサン（共に仮称）以外には，３人しか登場しない．つまり，ジョーの会話は特定の限られた相手との二人会話が多かったことが推測される．これは観察やインタビューデータからも窺える．面白いことに，次郎との会話とイーサンとの会話では，会話の構築過程が大きく異なっていた．次郎との会話は「知識の差」から生じるトピックを中心に，知っている者が知らない者に情報を伝え合う（両者ともに）傾向があった．一方で，イーサンとの会話においては，「共通知識」や「共通理解の表出」が指向された会話が多く観察された．紙面の都合上，以下に，イーサンとの会話のみ，特徴的な例を一つ紹介する．

次の断片は，ジョーとイーサンが，課外授業後にキャンパスに戻る電車を待っている場面での会話である．ちょうど昼時で，キャンパスに帰ってから昼ごはんに何を食べるかという質問が１行目に見られる．この質問に対し，ジョーは「味

1 Eth: ジョーなにたべる?
2 (0.8)
3 Joe: みそしると：おやこど：ん
4 (1.0)
5 Eth: まいにちたべるね. (.) すきだね.
6 (0.3)
7 Joe: そう.

(omitted)

8 Eth: ひとりのせんせいは(0.6) かんこくじんとけっくん-
9 けっこんしているんだけど,そのかんこくじんは: (.)
10 Joe: うん
11 Eth: のにほんごはペラペラ.
12 Joe: あああああ
13 (0.8)
14 Joe: たしかに: (1.5) にほんごがペラペラ (0.4) はなせる
15 (0.3) かんこくじん (1.0) よくある. よくいますね?
16 Eth: そうだね:キムさんみたいに.
17 Joe: そうだね:
18 (5.0)
19 Eth: かんこくじんにほんじんすきかな?
20 (1.4)
21 Joe: たぶん(0.3) そうみたいだ.
22 (3.8)
23 Joe: まあたいわんじんも: にほん (0.4) いっぱんのたいわんじん
24 も：にほんだいすき.
25 (2.5)
26 Eth: ジョーみたい.

噌汁と親子丼」と答える．３行目のイーサンの発話は，ジョーに関する既存知識（ジョーが味噌汁と親子丼を毎日食べており，好きだということ）を表出している．

その後，二人はその日の授業後の予定（ジョーが自分の大学の日本語の先生に会いに京都に遊びに行ってくるという予定）について確認する．その後，イーサンが自分の日本語の先生（全てアメリカ人）について語り出す．８－１０行目では，イーサンの先生の一人は韓国人と結婚していると説明し，その韓国人の日本語はペラペラだという評価を行う．この発話に対し，１４行目で，ジョーは「たしかに」と肯定的評価を行うが，ここで重要なのは，評価対象が「先生の結婚相手の韓国人」から「一般の韓国人」にすり替わっていることである．ジョーはイーサンの先生の結婚相手のことは知らないはずであるが，それをジョーが評価可能な対象に置き換えて，発話をつなげている．その後の，イーサンの発話も注目に値する．ここでは，一般的な韓国人からさらに「キムさん」という両者が知っているクラスメートに評価対象が推移している．共通理解の表出への指向はここにも見られる．

さらに，１９行目で韓国人が日本人のことが好きかどうかという質問をイーサンが投げかける．ジョーは一旦は「たぶん」「みたい」という不確定な返事をしているが，その後，対象をシフトさせ，「一般の台湾人」について，説明している．ジョーは台湾系アメリカ人で，一般的な台湾人の意見については基本的知識を持っているだろうと思われる．ここでの，評価対象のシフトは前述の例と同じように自分が評価可能な認識的優位性の高い対象にすり替える行為として捉えることができる．

これらの例から，ジョーとイーサンの会話のパターンは共通知識，共通理解の表出の指向が高いことがわかる．これに対して，次郎との会話は，質問・答えの隣接ペアで構成されている場合が多く，トピックも「日本」「アメリカ」など異文化に関するものがよく取り上げられる傾向にある．これは先行研究でも指摘されていることと通じる（Greer，2018）．

6. 考察

ローズとジョーの留学中の経験は人間関係の構築プロセスのみならず，相互行為の参加の仕方にも相違が見られた．ローズは複数人会話・複数会話に参加し，頻繁に出入りをするためのリソースを獲得し，ジョーは限られた会話相手と異なる認識的優位性が表される参加を行なっており，これによって，会話相手により異なるトピック・情報・リソースが得られたことが推測される．二人の元々の性格や能力その他の個人的な要因による違いもさることながら，留学中に構築された社会ネットワークのどのような位置にいるかによっても，行動や情報の差につながってくる．今回は，二人の相互行為のみに焦点を当てたが，より具体的で包括的な言語社会化プロセスを解明することが今後は求められる．

謝辞 本研究は国際交流基金の日本研究フェローシップ助成を受けたものである．

参考文献

Greer, T. (2018). Learning to say grace. *Social Interaction: Video-bases Studies of Human Sociality 1*(1). DOI: http://dx.doi.org/10.7146/si.v1i1.105499
Hasegawa, A. (forthcoming). *The social lives of study abroad: Understanding second language learners' experiences through social network analysis and conversation analysis.* New York: Routledge.
Jackson, J. (2008). Globalization, internationalization, and short-term stays abroad. *International Journal of Intercultural Relations, 32*, 349-358.
Kinginger, C. (Ed.). (2013). *Social and cultural aspects of language learning in study abroad*. Amsterdam: John Benjamins.
Kurata, N. (2011). *Foreign language learning and use: Interaction in informal social networks*. London: Continuum.
Pekarek Doehler, S. & Pochon-Berger, E, (2011). Developing 'methods' for interaction: A cross-sectional study of disagreement sequences in French L2. In J.K. Hall, J. Hellermann & S. Pekarek Doehler (Eds.), *L2 interactional competence and development* (pp. 206-243). Bristol, UK: Multilingual Matters.
Pomerantz, A. (1986). Extreme case formulations: A way of legitimating claims. *Human Studies, 9*, 219-229.